その十三　湖北

後期試験が終わって寒さがどん底の二月、湖北に出かけた。
同じ琵琶湖（ビワコ）でも北と南では風情がまったく違う。琵琶湖大橋に象徴される南部は活気ある明るい琵琶湖。それに対して湖北は雪が似合う静かな琵琶湖。
四月一日付けで豊中市役所に勤務する事が決まった。それまで暇なのでカメラを持って湖畔に立つ。カラー撮影する気になれないのでモノクロが似合う湖北に来た。空はどんよりとしている。やがて雲が切れ薄日が漏れる。読みは当たったがシャッターに力が入らない。
――もう仕事じゃないんだ
しばらくすると背後から子供のはしゃぎ声が聞こえてくる。何気なしに声がする方へ歩き出す。小さな集落があって二十人ほどの子供たちが古い軽トラックの周りに群がっている。低い荷台の上で肌の艶はいいが白髪の所為か初老に見える男が紙芝居をしている。
「弱い者いじめをするな！」
「わあ、月光仮面のおじさんだ！」
「やっつけろ！」
「そう！　月光仮面のおじさんは……」

何と！　オヤジだ。オヤジの紙芝居を見るのは初めてだ。オヤジも気付いた。流し目でチラッと見ただけで紙芝居を続ける。毎晩酒を飲んで、うだっていたオヤジとは別人だ。未だかってこんな生き生きとしたオヤジを見た事がなかった。

北風の中で子供たちが歓声を上げて拍手する。そして後ろでも拍手が……若い母親が何人かいた。もちろん俺も精一杯の拍手をする。

オヤジは衛生的とは言えない小さな引出しが並ぶ年代物の焦げ茶色の箱から、透けて向こうが見えそうな丸い煎餅（センベイ）を二枚取り出す。一枚はそのまま、もう一枚を真半分に割る。半円の煎餅の端にハケでトンカツソース（多分）を塗って、丸い方の煎餅に貼りつける。そしてハケの端でチョンチョンと目と鼻？　口？　を加える。

「ウサギや！」

そう、ウサギに見えるから不思議だ。真半分に割った方が耳だ。

「かわいい！」

順番待ちする女の子が両手を握りしめてピョンピョン跳ねる。オヤジは次々と煎餅をウサギに仕立てる。ところが子供たちは直ぐ食べない。

「ウサギちゃん、ごめんね」

しばらく煎餅のウサギを見つめてから耳を外して食べ始める。みんな同じように耳から食べる。

「おいしい！」
たわいもない煎餅は子供たちにとって可愛いごちそうなのだ。オヤジは優しく見守る。ほぼ食べ終わったのを見計らってから子供たちに頭を下げる。
「今日はこれで、おしまーい」
「えー」
驚く子もいればまだ煎餅をかじっている子もいる。
「あしたも、来るん？」
「いや、あしたは別の所じゃ」
「どこ？」
「次はいつ？」
「そうじゃなあ。来週かな」
ひとりの女の子がオヤジに近付く。
「らいしゅう？　らいしゅうって、いつ？」
「それは……内緒。でも必ず来る」
「ほんと！　じゃあ、約束して」
その女の子が背伸びすると小指を差し出して屈(カガ)むオヤジと指切りげんまんする。
「わかった、わかった。約束じゃ」

「絶対来てね！」
子供たちがオヤジに手を振りながら親と一緒に帰っていく。俺は先ほどの女の子の背中をずっと見つめ続ける。

＊

小雪がちらつくが寒くはなかった。むしろ心は温かかった。
道具を片付けるオヤジと言うより旧友に歩み寄る。
「久し振りやな。どや、元気にしとるか」
「久し振り？　これって親子の挨拶（アイサツ）かいな」
「元気なのは分かった。何してる？」
「それより急に老けたな。オヤジこそ何してんねん？」
「見てのとおりじゃ」
「儲かるか」
「ぼちぼちじゃ」
「なんぼ、もうてんねん」
オヤジは荷台から降りて運転席に座る。
「十円。乗れ」
助手席に座ろうとするが、ボロボロであまりにも汚い。別に汚れても構わないズボンをはい

てるが。オヤジは素手で座席をぬぐう。
「ホコリはたまっとらん。古いだけじゃ」
「十円は安すぎるで」
「子供相手じゃ」
「せやけど……さっきの売り上げは？」
小さな布袋を揉む。
「二百円ぐらいじゃ」
なんとも言えない表情をする。
「わしは……」
ヤケに口数が多い。溜(タ)まった話を子供たちにするわけにはいかない。だから俺にぶつける。ポンポンと道中の話が飛び出す。俺はフンフンと頷くだけで黙って聞く。その中身は含蓄(ガンチク)に富んでいた。旧友ではなく大先輩だった。

＊

敦賀の駅に着いた。三年ほど前の夏、ここからフェリーに車を乗せて守(モリ)と苫小牧へ向かったことを思い出す。
「結婚したか」
降りようとするとオヤジが笑いながら言う。

「アホな。まだ二十一。来月で二十二や。結婚してたら、こんなとこに来るはずないやろ」
「そりゃそうや」
オヤジが一旦言葉を止めてからポツリと続ける。
「お前が生まれた時、わしは二十一やった」
時代が違うと言えばそれまでだが、俺の歳にはオヤジは父親になっていたことに複雑な気持ちになる。経済力なんか関係ないのか。でも、お袋は早死にした。
「息子の歳ぐらい覚えておけよ」
「アテはあるんか」
「アテ？　結婚相手の事か」
「そや」
「あれへん。ええのん、おったら紹介して」
「一杯居(オ)るけどなあ。お前には若すぎる」
思わず俺は声に出して笑う。
「まだやったらええ。当分、帰らんつもりや」
「一寸待て。俺、あのボロ家に住んでる。鍵もかけんと出て行くなんて無茶苦茶や」
「なーに。鍵は潰れとるし、盗まれるモンはない」
――何といういい加減さ！

「そのカメラ……」
オヤジが首からぶら下げたカメラを見つめる。
「……お前のか」
「うん」
「そうか。安心した」
「安心？」
「一応喰うていくぐらいは稼いでるんやな」
確かに一眼レフカメラは一、二ヶ月分の給料ぐらいの値段がする。でも今はアルバイトの身。
「オヤジよりはマシや」
オヤジはなんとも言えない表情をする。
「風邪ひかんようにしいや。ほんだら」
ドアを閉めて駅に向かうとマフラーの爆発音がする。振り返ると白煙を残してオンボロ軽トラックが走り去る。

＊

――まだ四十代やから若いけど、俺の負けや
苦笑する。
――結婚か……

脳裏にふと一年ほど前に結婚した知秋（チアキ）の顔が浮かぶ。

――一年でも二年でもと、付いてきたら、結婚したかも……。

でもあのまま結婚したら……その後守（モリ）と夏子が結婚したら……知秋は俺と一緒にならなくて良かった事だけは確かだ。富山の旅館で俺がブレーキを踏んだのは今となれば正解だった。そう、一緒になっていたら俺は自暴自棄になって何の因果もない知秋に当たり散らすかも知れない。

今度は紙芝居を見ていた子供たちの生き生きとした表情が甦る。特にオヤジと指切りげんまんした女の子が忘れられない。確かに若すぎる。

――絶対来てね……か

今まで、俺に何一つしてくれなかったオヤジ。もちろん軽蔑していた。でも、今日、初めて紙芝居で子どもを喜ばす姿を見て、懐かしい先輩に合ったような気分になったのは……何故なんだろう。

「結婚はまだか」

あの一言に親としての愛情を感じた。

偶然の為せる業か。失意のなか、家に戻っても不在だったオヤジに、まさか冬の湖北で会うなんて。必然的な出合いなら理性が因果律を見い出して行動する――なんて理屈をこねたが、一言で言えばこうだ。

「オヤジ！　いい加減にしろ！」

他方、偶然なら、理性は眠りから覚めずに感情が優先して感動を創る。確かに今日、オヤジに温もりを感じた。今の俺にはこういう偶然が必要なのか。

凝集（ギョウシュウ）の困難さを伴わない――拡散のない偶然は、凝集の戦いに敗れた俺には安らぎのように思える。

＊

くたびれたディーゼル機関車に引かれた焦げ茶色の――煎餅が入っていたあの小さな引出しが並んだ箱と同じ色の四両編成の客車がホームに入ってきた。駅前の自販機で徹底的に冷えたコップ酒を買って列車に乗り込む。ガラガラだ。一両で十分なのにこれでは赤字になるはず。その赤字列車が動く。

雪が強くなってきた。

雪見酒。蓋（フタ）を開けて口に含む。冷たいから酒の味はまったくしない。蓋をして座席の下に置く。そこにはヒーターが通っている。しばらくすれば、ほどよい熱燗（アツカン）になるはず。

そのしばらくが俺の心を車窓から離す。また思考が始まる。これまでと違う美英子（みえこ）への思慕（シボ）の念が浮かぶ。

「六甲駅に来なかったなあ」

疑問符をつけないで思い出す。

「あっ！　確か、次の日も……その次の日も待つなんて書いてあった」
次の日はホームを確認することなく大学に向かった。俺に対する行動、あれほど不思議なものはない。それぞれに、どのような意図があったのか。何を思ってはぐらかすんだろうか。
――待てよ。はぐらかしているのは俺？　まあ、何もかも終わった
と、思いながらも美英子は消えない。感情の赴（オモム）くまま歩く美英子には因果律なんてない。かと言って、感情すべてが偶然だとすると偶然だらけになる。いずれにしても必然を無視した気まぐれ美英子の行動は理解できない。女と男の単なる見解の相違なのか。それとも俺が鈍感で未熟なだけなのか
京都での弁当を思い出す。始めて「マモル」と呼んでくれた事も。「頑張って作った」という自信ありげな顔も。
――どうなんやろ
座席下のコップ酒に触れてみる。
――まだ、ぬるそう
トンネルの中を規則正しいリズムを刻みながら列車は走っている。
――どう見ても美英子は守（モリ）に気がある
窓に映る男前でない顔を見つめる。こんな俺を好きになってくれた女子がいた事に驚く。
夏子……知秋、それにやはり冬見（フユミ）……冬見は死んだ。「もらわれた」にもかかわらず幸せを

掴めなかった。
夏子も「もらわれた」という意味では冬見と同じだ。一人娘だが養女だった。付き合っている時、養女と気づいた。それが破局の一因になったのかも知れない。
知秋は結婚して幸せを掴んだ……と思うが、夏子は守（モリ）と結婚して幸せになれるのか。冬見は俺を最後まで見限らなかった。でも初恋の相手と言うよりは青い想い出の女の子。青春に目覚めたという意味では夏子が初恋の相手だ。だから知秋には恋人という想いを持てなかった。
ここでハタと気付く。
何故かこの中に美英子が入っていない。
――好きになってくれてない？　でも俺はどうしようもないぐらい好きだ
座席下のコップ酒を取りだす。ちょうどいい塩梅（アンバイ）だ。蓋を開ける。思った通り、香りがツンと鼻をつく。口に含む。温かみが口から身体全体に染みわたる。でも心は冷えたまま。
「もう終わった」
この言葉も癖になった。
いつの間にか規則正しい反響音が消えて列車はトンネルを出て速度を落とす。やがて名もない駅に停車するはず。
外はもうすっかり暗い。どうやら淋しい事だけは確かだ。